



Title	動詞連用形に接続する接尾辞における句の包摂と品詞性・意味の関係について
Author(s)	平野, 啓太
Citation	間谷論集. 2021, 15, p. 67-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83215
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

動詞連用形に接続する接尾辞における句の包摂と 品詞性・意味の関係について

平野 啓太

〈キーワード〉 接尾辞 句の包摂 句接辞 格関係

1. はじめに

接辞とは、「語基に接続して派生にあずかる非独立的な（語彙的）形態素」（阪倉 1986：4）であるとされるが、その中でも語基の下につくものが接尾辞と呼ばれる。

このような派生語を成す要素となる接尾辞であるが、その中には次の(1)のように、「語基に上接する文節をもそのままに包摂し得る」（阪倉 1966：209）ものもある。

- (1) a. 求めつる中将だつ人來あひたる。 (源氏・帚木)
 b. いはせの森の呼ぶ鳥めいたりし夜のことは・・・ (源氏・早蕨)
 c. ものわがりのよい老人ぶつた物言ひをする。

(阪倉 1966：204 下線は原文のまま)

これはいわゆる「句の包摂」と言われる現象であるが、このように接尾辞が語（語基）を超えたレベルを接続する現象は、(1)のような名詞が前接する接尾辞以外に、次のような場合にも見られる。

- (2) a. 惰性で仕事を続けていると、この仕事に飛び込んだ頃の若々しい情熱を
 つい忘れてしまいがちになる。
 b. しまった。ストーブをつけっぱなしで出てきてしまった。

(『教師と学習者のための日本語文型辞典』)

(2)の例は、森山(1986)で「格助詞などをそのまま保持して基本的に節(補文)を取る」と指摘される句の包摂のタイプであるが、本稿では、このような動詞連用形接続において句の包摂が起こり、かつ名詞性、あるいは形容動詞性とみなされてきた接尾辞「たて」「かけ」「ばなし」「きり」「放題」「どおし」「まくり」「がち」「すぎ」「め」「気味」「そう」を扱う。¹

現代語において、どのような接尾辞においても句の包摂が起こるというわけではなく、それが起きるのは、むしろ特別な事例であると言える。そのため、このような接尾辞の品詞性と一つ一つの用法について、詳細に記述する必要がある。

本稿では以下のように考察を進める。まず、「第三形容詞性接尾辞」の存在に注目しつつ、句の包摂と接尾辞の品詞性との関係について考察する。次に、これらの接尾辞が表す意味がいくつかにまとめられることを示す。最後に、句の包摂が起こる接尾辞が表すそれぞれの意味が、名詞性の強弱に沿って連続的な関係を持つことについて述べる。

2. 先行研究

本稿で扱うような句の包摂が起きる接尾辞の表す意味についての詳細な研究は、管見の限り行われていない。ここではその品詞性についてどのように取り上げられているかを概観する。

影山(1993)は句の包摂を「語の内部に句が包み込まれる」(同上:326)現象と説明し、「もともと句ないし節を対象とする」(同上:329)接尾辞として句接辞(phrasal affix)を挙げている。影山(1993)は句接辞を「接続詞的なもの」と「名詞的なもの」に大別しているが、本稿で対象となる接尾辞は、(3)のように「名詞的なもの」として扱われている。

(3) (「名詞的なもの」)

- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------|
| a. [いまにも雨が <u>降り</u>] <u>そう</u> (だ) | f. [お金を <u>借り</u>] <u>っぱなし</u> |
| b. [なにか <u>言</u> いた] <u>げ</u> (だ) | g. [仕事に <u>追</u> われ] <u>ぎみ</u> |
| c. [仕事にかかり] <u>つきり</u> だ | h. [授業を <u>休</u> み] <u>がち</u> |
| d. [爛を <u>し</u>] <u>たて</u> の酒 | i. [ビールを <u>飲</u> み] <u>放題</u> |

e. [マンションを契約] 済みの人

(影山 1993 : 329 – 330)

青木 (2002, 2016) は通時的な研究であり、現代語で見られない古代語の句の包摂を取り上げている。すなわち「かほ (顔)」「やう (様)」「ごま (様)」「げ (気)」などの「形式名詞かそれに近いもの」である。それらの形式名詞が「ナリ」または「ニ」を伴うこと、つまり「文末部」、「接続部」で用いられることにより、「形容動詞」、または「接続助詞」というある種の連用成分が形成され、前接する動詞連用形 (及び形容詞語幹) が再び用言性 (述語性) を発揮することで句の包摂への「拡張」が起きたと述べている。そして、現代語における影山 (1993) での (3) のような句接辞も、「拡張」によって句を包摂するようになった可能性を指摘している。

また、句の包摂、句接辞といった用語を用いないが、「動的名詞文」の一部として (谷守 2018)、あるいは「合成名詞」の一部として (新屋 2014 など)、これらの接尾辞について触れられることがある。

品詞性については、これまでの研究では全体的に「名詞 (的なもの)」として扱われていることが多かったように思われるが、青木 (2016) のように文末部で「形容動詞」として解釈されるという指摘があるなど、考察の余地が残されているのではないかと思われる。

3. 句の包摂と品詞性

3 章では、これらの接尾辞がどのような品詞性を持つかについて考察していく。

本稿で扱う接尾辞の品詞について、2 章において名詞的なものとして扱われることが多いことはすでに述べた。

ここで、これらの接尾辞を個別的に見るために、既存の辞書を参考に接尾辞の分類を試みた山下 (1994)、田村 (2016) を参考にすると、山下 (1994) では「め」は名詞性接尾辞、それとは異なり「がち」は形容動詞性接尾辞として分類されている。また田村 (2016) では「め」も「がち」も名詞性接尾辞に分類され

ている。このように接尾辞間、分類者間で「ゆれ」が見られる。これは、「がち」に「がちの」「がちな」の二つの形式が認められることが原因であると思われるが、伝統的な品詞分類では、この種の接尾辞を十分に扱えないことがわかる。

3-1. 第三形容詞性接尾辞

村木 (2012) は、従来の形容詞、形容動詞に加え、「真紅」「素っ裸」「抜群」「互角」などの第三形容詞の存在を主張している。第三形容詞の特徴は以下のようである。

第三形容詞の特徴

- (i) 「-が」「-を」の形式で用いられた例がない。もしくは稀である。
- (ii) 「-の」の形式で名詞を修飾限定する連体用法が多い。
- (iii) 「-だ」「-だった」「-です」「-でした」といった形式で、述語としての用法がみられる。
- (iv) 「-に」(稀に「-で」)の形式で後続の動詞・形容詞を修飾する用法がみられる。

(村木 2012 : 213)

また、より近年の村木 (2019 : 293) では、第三形容詞の特徴として「連体修飾を受けない」ことも挙げられ、この点で名詞とみなせないことが指摘されている。

そして、村木 (2012) では、句の包摂、句接辞といった用語を用いず、それに相当する第三形容詞性接尾辞の働きについて以下のように述べている。

一方で、合成語を構成する要素の文法性が発揮される現象もみとめられる。(中略)「(兵学校に入り) たてのころ」「(縄梯子をおろし) っぱなしの家」のように、「はいりたて」「おろしっぱなし」の「はいり-」「おろし-」という動詞の「兵学校に」や「縄梯子を」という名詞をうける能力が発揮されている。このような単語は、動詞と形容詞の中間物(分詞)とみるのが、もっとも正当

であろう。両方の品詞の特徴を同時に備えているのである。

(村木 2012 : 206)

村木 (2012) では、このような働きを持つものがあるという言及に留まるが、本稿で扱う類の、動詞連用形接続で句の包摂を起こす接尾辞のほぼ全てがこの第三形容詞性接尾辞であることがわかる。すなわち、「たて」「かけ」「ばなし」「きり」「放題」「がち」「め」「気味」は全て、村木 (2012) 内で第三形容詞性接尾辞として分類されている。また、上記の第三形容詞の特徴に照らせば、「まくり」「どおし」「すぎ」などもここに分類されるものと思われる。²

村木 (2012, 2019) における品詞分類の記述から、本稿で扱う部分を抜き出すと、名詞、第三形容詞、形容動詞の違いを次の基準①～③を用いて示すことができ、表 1 のようにまとめることができる。

- ① 「-が」「-を」の形式で用いられる。
- ② 「-の」形式で名詞を修飾限定する。
- ③ 連体修飾を受けられる。

表 1 名詞、第三形容詞、形容動詞の基準

	①	②	③
名詞	+	+	+
第三形容詞	-	+	-
形容動詞	-	-	-

上の基準に基づけば、動詞連用形に接続するものの中では「ぷり」「方」などは、名詞性接尾辞に当てはまる。

同じく、この基準で判断すると形容動詞性接尾辞は「的」、「やか」などがあるものの、生産的に動詞連用形接続するものとなると実質「そう」のみであり、また句の包摂が起きる。³ 第三形容詞性接尾辞に、この種の句の包摂が見られる接尾辞のほぼ全てが含まれると述べたが、残りはこの形容動詞性接尾辞である。

3-2. 接尾辞における品詞の連続性

前節では従来の名詞性接尾辞、形容動詞性接尾辞に加え、どちらかに属するとは言いがたい第三形容詞性接尾辞について確認したが、本節ではさらに、第三形容詞性接尾辞内の振る舞いの違いを観察し、接尾辞の連続性について述べる。

ここで、「ぶり」「がち」「そう」について、基準①に従って「-が」形式を用いた例を示す。

- (4) a. 昨日の酒の飲み**っぷり**がすごかった。 (名詞性接尾辞)
 b. ??はしゃぎ**がち**がよくない。 (第三形容詞性接尾辞)
 c. *笑い**そう**がよくない。 (形容動詞性接尾辞)

第三形容詞性接尾辞「がち」は(4)で見たように、「-が」形式での使用は容認しにくく、その点で名詞性接尾辞「ぶり」と区別される。しかし第三形容詞性接尾辞の中でも「がち」と異なり、次のように「-が」形式で用いられるものがある。

- (5) 座り**っぱなし**が体によくない。

(5)の「っぱなし」の用例は、名詞性接尾辞の使用と重なっている。

ただし、以下のように連体修飾を受けられるかどうか(=基準③)という点では「ぶり」のような名詞性接尾辞と振る舞いが一致しない。⁴

- (6) a. ? ひどい飲み**っぱなし**
 b. ひどい飲み**っぷり**

ここまで、従来の品詞分類に加え、第三形容詞性接尾辞の存在、および第三形容詞性接尾辞内での振る舞いの違いを見たが、同じ品詞とされてきたものの中での振る舞いの違い、そして品詞間の連続性については、寺村(1982: 第1章)などで指摘がある。例えば、寺村(1982: 66-70)では、「元気」について、「が」

「を」「に」などの格助詞とともに用いられるという点で、名詞であると判断できるが、名詞と形容動詞（寺村 1982 では「名詞的形容詞」）を分かつ基準として、修飾する際「-の」であるか「-な」であるかというテスト（本稿での基準②）に照らすと、「元気」は場合によっては、以下のように両形式が可能になるとして

(7) a. 元気 $\left\{ \begin{array}{c} ナ \\ *ノ \end{array} \right\}$ オバアサン

b. あのオバアサンノ 元気 $\left\{ \begin{array}{c} ノ \\ *ナ \end{array} \right\}$ モトハ、畑仕事ニアルラシイ

（寺村 1982 : 69 下線は原文のまま）

すなわち、「元気」は名詞でありながら、寺村（1982）が言うところの「桜」「京都」などの「名詞らしい名詞」と違い、より名詞と形容動詞の境界の側に位置付けられることになる。

本稿はこのように品詞が連続性を持つという立場に立つが、前節の表 1 に示した複数の基準を満たすかどうかに従い、接尾辞の品詞の連続性を示すと以下の通りになる。

(8)

名詞性接尾辞 > 第三形容詞性接尾辞 > 形容動詞性接尾辞

3 章冒頭で触れた「がちの」「がちな」の「ゆれ」についても、「がち」をある一つの品詞に分類することの困難を示唆しており、品詞が連続性を持つことの証左となるであろう。

さらに、同じ第三形容詞性接尾辞内での振る舞いの違いに注目すると、「-が」形式を取れる（＝基準①）「ばなし」の方が、「がち」と比べると、より名詞側に位置すると考えられる。

(9)

名詞性接尾辞 > 第三形容詞性接尾辞 > 形容動詞性接尾辞
 「ばなし」 「がち」

ここでもっぱら「ばなし」「がち」を扱っているが、他の接尾辞については、「ばなし」と同じように「-が」形式で用いられる、「たて」「かけ」「きり」「放題」「どおし」「まくり」「すぎ」と、「がち」と同じように「-が」形式で用いられない、「め」⁵「気味」とに分けられる。

本稿では、(8)(9)のような連続を名詞性の強いものから、弱いものへの連続として捉えることにする。

3-3. 句の包摂と品詞性

本節では句の包摂と品詞性との関係について考察する。

影山 (1993) では (10) のように句の包摂が起きない接尾辞は項が「の」格で表示され、句の包摂が起きる接尾辞は項が「を」格で表示されるとしている。

(10) 項の格表示

語彙的：酒の/*を〔飲みっぷり〕
 糠漬けの/*を〔食べごろ〕
 ドイツリートの/*を〔歌い手〕
 統語的：〔電気を/*のつけ〕っぱなし
 〔宿題を/*の忘れ〕がちな生徒
 〔アルバイトを/*のし〕ながら

(影山 1993 : 330)

しかし、(10)において「っぱなし」については「がち」と違い、名詞性接尾辞「っぷり」と同様に、「電気のつけっぱなし」のように項の「の」格表示も可能であると思われる。

そこで「ばなし」について、項が「の」格で表示されるか、「を」格で表示されるかについて、その生起環境を観察すると次のようになる。

(11) a. 湯の出しっ**放**しがよくない。

b.? 湯を出しっ**放**しがよくない。

c. 風呂は湯の出しっ**放**しだ。 (谷守 2018 : 166)

d. 風呂は湯を出しっ**放**しだ。 (谷守 2018 : 166)

前節で「ばなし」は、他の名詞性接尾辞のように「-が」形式の前方で用いられる（基準①を満たす）ことを指摘したが、その場合、(11ab)のように「の」格表示は可能だが、「を」格表示は容認しにくい。一方、(11cd)のように文末部（述部）では「の」格表示も「を」格表示も可能である。(11b)のように「-が」形式とともに用いられる場合、項の「を」格表示が認めにくいことから、句の包摂現象は、名詞性の弱さと結びついていると考えられる。

先行研究で挙げた青木（2002, 2016）で接尾辞が「文末部」（と「接続部」）で用いられることで句の包摂が起こるという指摘がすでにあり、上の観察はそれに沿ったものであるが、「ばなし」のように、文末部でも「-が」（及び「-を」）形式でも使えるものと、「がち」のように、そもそも「-が」（及び「-を」）形式では用いられないものの2種があるということを付言することができる。

本稿で取り上げる他の接尾辞についても、項が「の」格で表示され得るかという点で分類すると以下のように分類できる。

「ばなし」類

電気のつけっぱなし、パンの焼きたて、りんごの食べかけ、窓の閉めつきり、勉強のしどおし、ゲームのやり放題、迷惑のかけまくり、お酒の飲みすぎ

「がち」類

* 宿題の忘れがち、* 塩の控えめ、* 学校のサボり気味、* ご飯の食べそう

本節での考察を(9)で示した品詞の連続性と掛け合わせて、まとめたものが以下の表2になるが、名詞性の強弱と項の表れ方に相関性があり、句の包摂は名詞性の弱い接尾辞において起きやすいことがわかる。

表2 品詞の連続性と句の包摂

名詞性が強い ←————→ 名詞性が弱い

	名詞性接尾辞	第三形容詞性接尾辞 ⁶		形容動詞性接尾辞
「の」格表示	○	○	○	○
句の包摂 (「を」格表示)	✕	○	✕	✕
接尾辞	「ぶり」「方」	「ばなし」「たて」 「かけ」「きり」 「放題」「どおし」 「まくり」「すぎ」	「がち」 「め」 「気味」	「そう」

4. 意味と品詞性との関係

4章では、まず句の包摂を起こす接尾辞が表す意味を概観した後で、その意味と3章で考察した品詞性との関係について考察する。

4-1. 意味分類

本節ではこれらの接尾辞の意味分類を行う。個々の接尾辞の意味については詳細な研究がなされてきたが、ここでの意味分類は多義性に留意しつつ、できるだけ簡潔にまとめたものである。

表3 句の包摂と意味

意味	接尾辞	参考
既然	たて	藤巻 (2018)
途中	かけ	楊 (2012)
結果・放置 ⁷	ばなし、きり、放題	中村 (2009)、新山 (2018) 『日本国語大辞典』(第二版)
継続	ばなし、きり、どおし	中村 (2009)、新山 (2018) 『日本国語大辞典』(第二版)
多回性	まくり ⁸ 、がち	城田 (1998)、八尾 (2006)
程度	すぎ、め	『日本国語大辞典』(第二版)
性質・状態の傾き ⁹	気味	八尾 (2006)
様態	そう	『日本国語大辞典』(第二版)

以下に、句の包摂が起こっている例文を列挙する。¹⁰

(12) 彼はダンスを習いたてだ。(既然)

(13) 彼は本を読みかけた。(途中)

(14) a. 多勢の来場がありましたが、初めてキャンピングカーを見る方が多く、
今日もしっかりとキャンピングカーの楽しさをしゃべりっきりの一日
でしたね。(継続)

< <http://www.lthomes.co.jp/blog2/archives/date/2017/01/09> >

(最終検索日 2020.10.29)

b. はるるは、先週の土曜日は朝から出かけており、19時に帰宅するまで
の間ずっと家中を閉めっきりでした。(結果・放置)

< <https://www.haruru29.net/blog/post-6744/> >

(最終検索日 2020.10.29)

(15) a. 彼は三時間歌を歌いっぱなしだ。(継続)

b. 彼は部屋の電気をつけっぱなしだった。(結果・放置)

(16) 彼はひげを伸ばし放題だ。(結果・放置)

- (17) ルピック氏が、けさからかれをからかいどおしなので、つい、にんじん
は、どえらいことをいってしまった。(継続) (『にんじん』、BCCWJ)
- (18) 私の彼氏は空手をやって鍛えて鍛えて胸板を厚くする努力をしまくりで
す! (多回性) (「Yahoo! 知恵袋」、BCCWJ)
- (19) 思いつくままにしゃべる人間は、不用意な機知を弄し**がち**である。(多回性)
(『赤と黒』、八尾 2006)
- (20) a. 彼は悪口を言い**すぎ**だ。(程度)
b. 最近の芋焼酎は香りを抑え**め**ですがこの「つわぶき紋次郎」は、いも焼
酎独特の香りをしっかりと持っています。(程度)
< <https://item.rakuten.co.jp/e-angel/10004617/> > (最終検索日 2020.10.29)
- (21) 彼は最近学校をサボり**気味** / **がち**だ。(性質・状態の傾き)
- (22) 彼はノートを落とし**そう**だ。(様態)

4-2. 名詞性の強弱と意味の対応

表2において、第三形容詞性接尾辞の中でも「がち」「気味」「め」が、より形容動詞性接尾辞に近い、つまり名詞性が弱いことが示される。本節では表2においてより名詞性接尾辞の側に位置する、「ばなし」が属するグループ内での名詞性の強弱について考察し、その上で名詞性の強弱と意味の対応についてまとめる。

このグループ内に属する「たて」「かけ」が名詞的に働く使用法について、藤巻 (2018) は「パンの焼きたて」、「リンゴの食べかけ」がそれぞれ、「焼きたてのパン」「食べかけのリンゴ」と同等の意味を持つという指摘している。¹¹ つまり「たて」「かけ」が「もの」を表していると考えられる。

- (23) a. 太郎は[リンゴの食べ**かけ**]を手にとって食べた。
b. 太郎は[パンの焼きた**て**]を口にほおばった。
- (24) a. 太郎は[食べ**かけ**のリンゴ]を手にとって食べた。
b. 太郎は[焼きた**て**のパン]を口にほおばった。

(藤巻 2018:102)

一方、その他の「ばなし」「きり」「放題」「どおし」「まくり」「すぎ」が名詞的に用いられた場合（ここでは基準①を満たす場合）を考えると、必ず次の(25)のように「こと」を表す。

(25) a. 電気のつけっぱなし / きりが良くない。

b. 眉毛、口回り等、顔のうぶ毛の伸ばし放題は NG。

< <https://ameblo.jp/lilybonbon/entry-11985827108.html> >

(最終検索日 2020.10.29)

c. 迷惑のかけどおし / まくりが人間関係を悪くする。

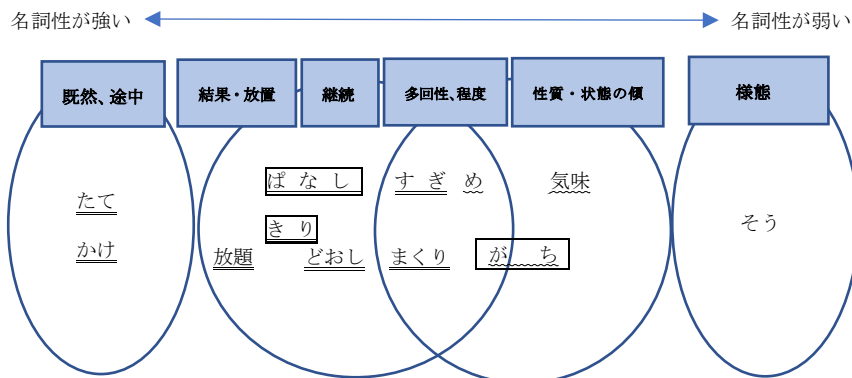
d. 肉の食べすぎが体に悪い。

Croft (2001 : 89) では、意味クラスと命題行為の組み合わせが類型論的に無標の結合である場合、類型論的プロトタイプを形成するとしており、従来の「名詞」「形容詞」「動詞」という用語は、それを記述するものであるとしている。すなわち、「物体について指示」するものが「名詞」であり、また「属性により修飾」するものが「形容詞」、「動作の叙述」をするものが「動詞」である。

このような品詞をプロトタイプとの関係で見る文法観に従えば、具体的な実体としての「もの」を表す用法のある「たて」「かけ」の方がより名詞性が強く、「こと」を表す「ばなし」「きり」「放題」「どおし」「まくり」「すぎ」は、それと比べ名詞性が弱いと考えることができる。

表3で示した各接尾辞の意味と、表2と本節で述べた名詞性の強弱を掛け合わせると、以下の図1のようになる。

図1 名詞性の強弱と意味



下線「 」、「 」はそれぞれ表2で同じグループに位置付けられていたことを意味する。また、「ばなし」「きり」の位置は「結果・放置」「継続」、「がち」の位置は「多回性」「性質・状態の傾き」の2つの意味にそれぞれまたがることを示している。

4-3. 意味同士の関係

前節の図1中に並んだ意味は個別的なものなのであろうか。本節ではこれらの意味同士の関係について、名詞性の強いものから弱いものへと順に考察する。

まず「たて」「かけ」とそれが意味する「既然」「途中」であるが、これらは先述の通り具体的な「もの」を表し得る。そうしたことから名詞性が最も強い。

(26) a. 太郎は[リンゴの食べかけ]を手にとって食べた。

b. 太郎は[パンの焼きたて]を口にほおばった。

((23) 再掲)

その一方、(26)と異なり、(27)のような例文では、「たて」「かけ」はそれぞれ主語の「状態性」を表していると言える。

- (27) a. 彼はダンスを習**いた**ただ。(既然) ((12) 再掲)
 b. 彼は本を読み**か**けた。(途中) ((13) 再掲)

「ばなし」「きり」「放題」が表す「結果・放置」の意味もまた、中村(2009)の意味区分(「結果状態の継続」「放置の状態」)で指摘されているように「状態性」を表していると言える。

- (28) a. この部屋はドアを閉め**っ**ばなし/きりだ。(結果・放置)
 b. 彼はひげを伸ばし**放**題だ。(結果・放置)
 ((16) 再掲)

こういった「状態性」は同じ「ばなし」「きり」の次の(29a)のような使用では動作の「過程」に注目する「継続」の意味を表すようになっている。また(29b)の「どおし」は「継続」のみを表す接尾辞である。

- (29) a. 彼は三時間歌を歌い**っ**ばなし/きりだ。(継続)
 b. 彼は一日中、勉強をし**ど**おしだった。(継続)

Croft (2001: 87)によれば、「状態」は、「物体(および属性)」の意味的特性、「過程」は「動作」の意味的特性として位置付けられる。本稿ではこれに従い、前節の図1においても、「継続」より、「結果・放置」という意味を、より名詞性の強い側(左側)に配置している。

次の「多回性」「程度」の段階になると動作の「過程」を表すとともに、その「度合い」の高低にも注目する用法になる。

- (30) a. 彼はこー週間、友達に迷惑をかけ**ま**くりだ。(多回性)
 b. 彼は最近アイスばかり食べ**が**ちだ。(多回性)
 (31) a. 彼は悪口を言い**ず**いだ。(程度) ((20a) 再掲)
 b. 最近の芋焼酎は香りを抑え**め**だ。(程度)

そして、「性質・状態の傾き」「様態」の段階になるともっぱら「度合い」の高低に注目することになり、名詞性はかなり弱いものになる。

(32) 彼は最近学校をサボり**気味 / がち**だ。(性質・状態の傾き) (21) 再掲

(33) 彼はノートを落とし**そう**だ。(様態) (22) 再掲

このように、これらの意味は個別的ではなく、名詞性の強いから順に、「もの」>「状態性」>「過程」>「度合い」へと連続的に変化していくことがわかる。

5. まとめと今後の課題

本稿では、動詞連用形に接続し、句の包摂を起こす接尾辞の品詞について連続性の観点から論じ、次にその表す意味についてまとめた。その上でこれらの接尾辞の意味と品詞性、意味同士の関係について考察した。研究の結果をまとめると次の通りである。

- ①句の包摂と品詞性との関係について、名詞性が弱いと思われる接尾辞において包摂が起きやすいと思われる。
- ②句の包摂を起こす接尾辞は「既然」「途中」「結果・放置」「継続」「多回性」「程度」「性質・状態の傾き」「様態」という特定の意味でまとめられる。
- ③句の包摂が起こる接尾辞の意味は名詞性の強弱に沿って、接尾辞間で共通部分を持ちつつ、「もの」>「状態性」>「過程」>「度合い」という連続性が見られる。

本稿では、現象の記述を中心に行ったが、その結果明らかになった③のような連続性がなぜ見られるのかについて、理論的に考察できる余地が残っている。それに加え、本稿における「名詞性の強弱」の勾配が何を指し示しているかについての考察は次の研究課題としたい。

また、3章で言及したような「がちの」「がちな」などの「-の」「-な」形式の「ゆれ」があることについて、本稿での考察には積極的に用いなかったが、個々

の接尾辞において偏りがあることがわかる。例えば、「たて」や「ばなし」について「-な」形式は容認性が低く感じられるのに対し、「がち」「め」については「-な」形式は自然である。¹² 今後、個々の接尾辞における「-の」「-な」の選択傾向を量的な観点から詳らかにすることが、本稿で論じた接尾辞の品詞、意味の連続性の考察をより深める上で重要であると考えている。

注

- 1 本稿で取り上げる形式は影山（1993）で挙げられた形式に加えて、それに類すると筆者が考えるものである。これらは必ずしも網羅的とは言えないものの、本稿で議論しようとしている問題をある程度カバーしているものとする。実際、新山（2020）でも、同様の形式に注目していることから、これらが記述的、理論的に興味深い特性を持つことが次第に注目されてきていると言える。本稿で得られた結論を基に、他にどのような形式を対象としていくかは、今後の課題としたい。
- 2 脚注 10 で言及する「ずくめ」「づめ」も村木（2012）での第三形容詞性接尾辞の中に含まれている。
- 3 形容動詞性接尾辞「げ」は青木（2016）によると、古典では句の包摂が盛んに見られた。
 (i) 御返など、[あはれをしり] げに聞えさせかはさんを、いと憂くのみおぼゆれば、
 (『夜の寝覚』巻三、青木 2016 下線は原文のまま)
 現代語では影山（1993）での(3b)のような「動詞連用形+た+げ」を除くと、動詞連用形に「げ」が付くのは「ある」の場合のみであり、また「自信ありげ」などは可能だが、「レストランがありげ」のように「が」格を挟んだ使用はしない。そのため本稿では対象としない。
- 4 「ばなし」は「長時間の飲みっぱなし」のように「一部」の連体修飾を受けられる。このことも本稿で扱うような「品詞の連続性」に関係する現象だと思われるが、詳しい分析は今後の課題としたい。
- 5 「め」については、前方の動詞が「抑える」「控える」など、ごくわずかに限られるという点で、本稿で扱う他の接尾辞と異なる。本稿では、「-が」形式で用いられないものとしたが、「このスープは塩分が控え/抑えめだ」のような「AはBがCだ」という構文内では、「-が」形式で用いられる例が認められる。このような「め」の振る舞

いの詳細については稿を改めて論じたい。

- 6 ただし、第三形容詞性接尾辞なら必ず句の包摂を起こすというわけではないことに留意する必要がある。例えば、村木 (2012) では、「盛り」(「食べ盛り」)「忘れ」(「消し忘れ」)なども第三形容詞性接尾辞として挙げられているが、句の包摂が可能だとは認めるににくい。

(i) a.*私の子供はご飯を食べ盛りだ。

b.??彼は黒板を消し忘れだ。

- 7 中村 (2009) では、数ある研究内で共通するものとして「動作・出来事の継続」用法、「結果状態の継続」用法、「放置の状態」用法の3つを挙げている。新山 (2018) は、中村 (2009) の意味分類を受け、「動作・出来事の継続」用法と違い、「結果状態の継続」「放置の状態」用法の意味においては、次のように他動詞の内項が主語として現れる自動詞構造が生成されると述べている。

(i) a. ランプが点けばなしだ (結果状態の継続)

b. 本が読みっぱなしだ (放置状態の継続 (ママ))

(新山 2018 : 53)

本稿ではこのような構文的共通性を鑑み、「動作・出来事の継続」用法を「継続」、「結果状態の継続」用法、「放置の状態」用法を合わせ「結果・放置」とすることで「っぱなし」の意味用法を二分する。

- 8 城田 (1998 : 146) は複合動詞「まくる」について「うごきが休みなく、回数を重ね、激しく行われることを示す」としている。本稿では「まくり」も同様の意味を持つと考える。
- 9 八尾 (2006) は「気味」と一部の「がち」の用例は「状態の傾き」を表すとしている。例としては「黒目がち」「うつむきがち」などが挙げられているが、本稿では「状態の傾き」を「性質・状態の傾き」とし、「がち」と「気味」の交替が可能な用例は共に「性質・状態の傾き」を表すと考えている。
- 10 見つけられる用例は多くないものの「ずくめ」「づめ」なども「継続」あるいは「結果・放置」と思われる意味において句の包摂が起こっている用例が見られる。
- (i) 子供たちは、普段から鍛えているのか開園から閉園まで TDLを走りずくめでも全然びくともしない程の体力の持ち主です

< https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1246621092 >

(最終検索日 2020.10.29)

- (ii) 私は、月一回の心臓検診は手術を受けた大阪の病院まで行っていた。が、月一回とはいえ、朝のラッシュ時に電車に立ち詰めで行くのは辛かった。

< <https://blog.goo.ne.jp/kaminaribiko2/e/65e717e8ad024d06bb7300023cbbb814> >

(最終検索日 2020.10.29)

また、「加減」も「性質・状態の傾き」と思われる意味を表し、句の包摂が起こっている例が一部見られる。

- (iii) 藤田菜七子騎手も若干、手綱を抑え加減です

< <https://ameblo.jp/meshispo-keiba/entry-12241701522.html> > (最終検索日 2020.10.29)

- 11 同じく村木 (2012) で第三形容詞性接尾辞とされる「さし」も、同様の用法が見られる。
 (i) タバコの吸いさしを灰皿に捨てた。
 12 「がち」について、幸田 (2011) は小説、新聞などから実例を採取しているが、「がちな」が 141 例なのに対し「がちの」は 9 例であると、「-な」形式での使用が主であることを指摘している。

参考文献

- 青木博史 (2002) 「古代語における「句の包摂」について」『国語国文』第 71 巻第 7 号 pp.40-52
 青木博史 (2016) 『日本語歴史統語論序説』ひつじ書房
 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
 幸田佳子 (2011) 「接尾辞「がち」と「ぎみ」について」『語学教育研究論叢』第 28 号 pp.287-301
 阪倉篤義 (1966) 「接尾語の位置」『国語国文』第 35 巻第 5 号 pp.197-209
 阪倉篤義 (1986) 「接辞とは」『日本語学 3 月号』pp.4-10
 城田俊 (1998) 『日本語形態論』ひつじ書房
 新屋映子 (2014) 『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房
 谷守正寛 (2018) 「動的事態を表す名詞で締める名詞文とその主題：「駅は次の角を左折だ」等を中心に」『言語と文化』第 22 号 pp.149-171
 田村泰男 (2016) 「和語系接尾辞（接尾語）について」『広島大学国際センター紀要』第 6 号 pp.49-58
 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版

- 中村愛 (2009) 「「～っぱなし」の意味・用法に関する研究」『実践国文学』第75号 pp.114-119
- 新山聖也 (2018) 「名詞性を持つ複雑述語・文末形式における自動詞構造の分析」『日本言語学会第156回大会予稿集』pp.51-56
- 新山聖也 (2020) 「統語的に形成される述語名詞について」『日本言語学会第160回大会予稿集』pp.244-250
- 藤巻一真 (2018) 「アスペクト形式の「たて」と「かけ」の名詞的用法について」『神田外語大学紀要』第30号 pp.93-113
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
- 村木新次郎 (2019) 『語彙論と文法論と』ひつじ書房
- 森山卓郎 (1986) 「接辞と構文」『日本語学3月号』pp.19-27
- 八尾由子 (2006) 「傾向を表す接辞 ガチ、ギミ、ヤスイ」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第21号 pp.127-139
- 山下喜代 (1994) 「接辞分類表の作成－三省堂国語辞典第4版を資料として－」『講座日本語教育』第29分冊 pp.378-400
- 楊舒涵 (2012) 「「V かけの N」構文の意味解釈と成立条件－アスペクトを中心に－」東北大学修士論文

Croft, W. (2001) *Radical Construction Grammar*, Oxford: Oxford University Press (山梨正明監訳 (2018) 『ラディカル構文文法－類型論的視点から見た統語理論－』研究社)

【用例出典】

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 国立国語研究所 (検索ツール「中納言」)
『教師と学習者のための日本語文型辞典』(1998) くろしお出版

【辞書】

『日本語国語大辞典 第二版』(2000~2002) 小学館

ヒラノ ケイタ (大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程)

Relationship between Phrasal Compound and Part of Speech/ Meaning of Suffixes Attached to Continuative Forms of Verbs

HIRANO Keita

Generally, suffixes attach to bases and form derivatives. However, there are some cases that suffixes attach to phrasal level. This phenomenon is called “phrasal compound”. This thesis, focusing on phrasal suffixes attached to continuative forms of verbs, “-tate”, “-kake”, “-ppanashi”, “-kkiri”, “-houdai”, “-dooshi”, “-makuri”, “-gachi”, “-sugi”, “-me”, “-gimi” and “-sou”, described and indicated what kinds of nature they have from the viewpoint of part of speech and what meanings phrasal suffixes expressed.

Firstly, according to the point of part of speech, it stated that the above phrasal suffixes are not nominal suffixes, but equivalent to third adjective suffixes and nominal adjective suffixes.

Secondly, it described how nominal suffixes, third adjective suffixes and nominal adjective suffixes were sorted by nominality in descending order, based on the continuity of part of speech. Furthermore, it appeared that suffixes of more nominality like “-ppanashi”, which are being used in front of “ga” case, and suffixes of less nominality like “-gachi”, which are not being used in front of “ga” case, are both existed in third adjective suffixes.

Thirdly, the question of the usage of “wo” or “no” had been pointed out in the representation of argument. It showed that in third adjective suffixes, there are suffixes like “-ppanashi” whose argument can be represented by either “no” case or “wo” case, while there are also suffixes like “-gachi” whose argument can be solely represented by “wo” case. Moreover, it stated that “phrasal compound” occurred on suffixes of weak nominality according to the viewpoint of occurrence of “wo” case.

Furthermore, it appeared that the above-mentioned suffixes have some specific

meanings of “anterior”, “halfway”, “resultative / neglection”, “durative”, “degree”, “repetition”, “nature and state tendency” and “appearance”.

Finally, investigation was carried out on the relationship between the meaning of these suffixes and nominality. Putting the meanings of these suffixes in descending order according to the nominality, it would be “anterior, halfway”, “durative, resultative / neglection”, “degree, repetition”, “nature and state tendency” and “appearance”. It stated that these meanings are not discrete, but linked to each other according to the above order of nominality.

【訂正】

本論文の表2（76 ページ掲載）に誤りがありましたので、下記の通り訂正いたします。

<訂正前>

表2 品詞の連続性と句の包摂

名詞性が強い ← → 名詞性が弱い

	名詞性接尾辞	第三形容詞性接尾辞 ⁶		形容動詞性接尾辞
「の」格表示	○	○	○	○
句の包摂 （「を」格表示）	×	○	×	×
接尾辞	「ぶり」「方」	「ばなし」「たて」 「かけ」「きり」 「放題」「どおし」 「まくり」「すぎ」	「がち」 「め」 「気味」	「そう」

<訂正後>

表2 品詞の連続性と句の包摂

名詞性が強い ← → 名詞性が弱い

	名詞性接尾辞	第三形容詞性接尾辞 ⁶		形容動詞性接尾辞
「の」格表示	○	○	×	×
句の包摂 （「を」格表示）	×	○	○	○
接尾辞	「ぶり」「方」	「ばなし」「たて」 「かけ」「きり」 「放題」「どおし」 「まくり」「すぎ」	「がち」 「め」 「気味」	「そう」

上記の誤りのため、当初のままでは論旨の通じない箇所が生じてしまいました。
お読みくださった方には混乱をまねいてしまったことと存じます。失礼しました。

平野 啓太